

コロナ禍でも同世代の闘病仲間と オンラインで交流できるようにしたい



▲事例解説動画

【学校】高等学校&大学 / 【きっかけ】同じ時期に闘病していたこと / 【準備期間】当日

新型コロナウイルス感染症の影響により、入院中の病棟では患者同士の接触ができなくなりました。以前は、闘病している者同士がつながり、気軽に相談できる仲間づくりができていました。つながりから「ひとりじゃない」という気持ちが芽生え、それが治療に向かうエネルギーになる様子も感じられることがあります。今回は自宅療養中の生徒と入院中の生徒が、オンラインの交流を通じてつながり、励まし合う関係になれた事例を紹介します。

- ☑医療者も生徒に闘病仲間が必要と感じ、交流を促してくれた
- ☑生徒2人の年代が同じことで、より気持ちの距離が近くなった
- ☑闘病する仲間として互いに励まし合い、深い関係性が育まれた

本人家族に
意思確認

医療者と
調整

オンライン
交流開始

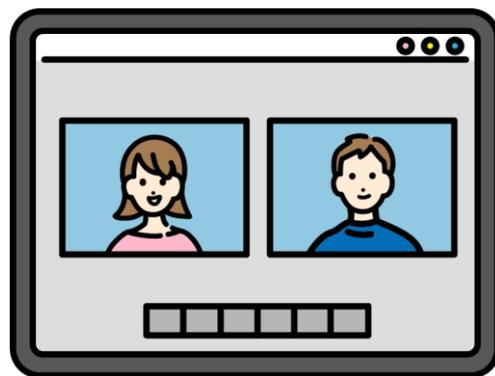
継続的な
関係づくり

自宅療養中のAさんと、入院治療中のBさんは、病気の種類も病院も違う高校生と大学生の同世代でした。2人とも、ポケットサポートが実施する交流支援を通じて、以前から関係性がありました。

Aさんは退院直後ということもあり、感染症対策の関係から自宅療養生活が続いていました。一方、Bさんも入院治療中はベッド安静のため時間を持て余していました。

普段は2人とも違う時間に、支援員や大学生ボランティアと交流する「ポケットスペース」へ参加していましたが、ある日2人の希望する時間が重なることがありました。

そこで、Bさんの入院する病棟スタッフへ「同世代の年齢で自宅療養中の子ども、一緒に参加してオンライン交流できないでしょうか？」という相談と共に、AさんとBさんへも同様の提案を伝えたところ、調整が行われることになりました。生徒本人と保護者家族にも了承いただき、医療スタッフも「Bさんには闘病している仲間が必要だ」という認識で一致し、オンライン交流をすることになりました。



病院との調整の間に大学生のボランティアと、交流支援の内容を考えていきます。互いが初対面ということもあり、アイスブレイクと自己紹介を織り交ぜたオリエンテーションと、その後に協力ゲームをすることで打ち解けるというアイデアを採用しました。

自己紹介のオリエンテーションでは「8つの窓」というアイスブレイクの手法を使い、互いの関心事や趣味・嗜好などを知ることができました。また、協力して課題を進めるボードゲームをプレイすることで、自然と相談やアイデアを出し合える関係性を作りました。

その後の余った時間ではフリートークを行いました。偶然にも住んでいる地域が近かったことなどの、共通点も多く意気投合する様子が見られました。

終了後も入院中のBさんは、初回の交流がとても楽しかったようで、回診にくる医療スタッフへもその話ばかりをしていたと報告がありました。

翌日も時間調整を行い、オンライン交流を実施しました。前日に打ち解けた2人は、ポケットサポートの職員が介入する必要もなく会話が始まり、画面に映る状況から「しんどかったら、寝たままで体を起こさなくてもいいよ」など、闘病のつらさを知っている者同士だからこそその励まし合いの発言も見られました。その後、Bさんが検査のある日も、Aさんが時間を調整しながら交流は続きました。

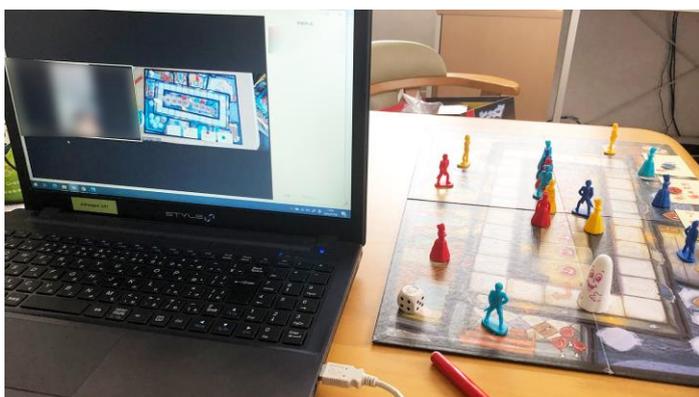
違う病院で長期入院を経験している人は、今まで一緒に活動や、つながることが難しい状況がありました。今回、コロナ禍が追い風となり、本人と保護者家族の同意と、入院病棟の医療者の許可があったことで実現することができました。

【Aさんの変化】

Aさんは入院治療中のBさんに対して、「しんどそうだったけど、頑張ってたのが見えた。少し心配だけど、オンラインで繋いでる時間は楽しいから頑張りたいくなるんよな。自分もそうだったから良くわかる。Bさんとまた一緒にできたらいいな。」という言葉があり、長期療養する仲間を思いやる気持ちが芽生えたようでした。

【Bさんの保護者から】

「入院している時、今までなら他の子と話したりしてたけど、それもできなくなってたから、久しぶりにこんな楽しそうな様子が見られました」と病院内でも笑顔が見られたことに感激されていたようでした。



▲入院中の生徒とボードゲーム交流の様子



▲様々な ICT 機器を活用してオンライン交流



▲液晶ペンタブレットを活用した学習支援の様子



▲多人数でコミュニケーションゲームで遊ぶ様子

初回の自己紹介のときに「今日は今まで何をしていたの？」の質問に2人とも「薬飲んで、それ以外は何もすることがなかった」という共通点が重なり、「同じだ!」と笑顔が見られた瞬間が印象的でした。疾病は違いますが、同じような病気療養経験のある当事者同士は分かり合える部分も多く、同世代かつ偶然ではあるものの居住地が近いこともあり、短い時間ですが病気の事を忘れて笑顔で語り合う10代らしい一面が見られた事例となりました。